

# 文化

2014. 5. 29

「抗がん剤の副作用に髪の毛が抜ける、というのがあります。あれ、イヤなものですよ、私も抜きました。けど病院はこんなことは心配していません。なぜかというところ、また生えてきますからね。あっ、言っときますが、また生えてくるのは治療の前に毛があった人だけですよ。」

43歳の時に悪性度の高いがんと出会った。手術と抗がん剤治療で乗り越えたが、抗がん剤の後遺

症で全身のしびれは今も続く。日常生活にも不自由するが、年に50回ほど高座に上がる。ただし、プロの噺家ではない。名刺には「全日本社会人落語協会副会長」の肩書とともに「いのちの落語家」と載せている。

三昧の毎日。就職後は落語どころではない日々が続いたが、27歳から全日本社会人落語選手権に出場するようになった。

笑いの力を再認識したのは、がん治療で入院した時だ。定期健診で肺細胞がんが見つかった。手術をしても半年以内に

再発する確率は90%、3年後の生存率は5%と言われたが、笑いが生きる支えになった。

がんの治療を終えた後、好きな高座に再び上がるようになった。創作落語に「笑いは最高の抗がん剤」というテーマを盛り込むことにした。最

初の独演会では定員を大幅に上回る150人ものお客様が来てくれた。そのうち3分の2はがんの人や家族。がんで入院した時の出来事をもとにした小噺をすると、大きくうなずいたり涙ぐみつつ笑ったりする人が大勢いた。

「いのちの落語 良寛ものがたり」を初めて披露する筆者(2013年7月、新潟市)



## がんを越え落語に生きる

◇患者に笑う喜びを、良寛さんの人生通じ伝えたい◇

樋口 強

「いのちの落語 良寛ものがたり」を初めて披露する筆者(2013年7月、新潟市)

初めは、現在の新潟県出雲崎町で生まれた江戸時代の名僧・良寛をテーマにした新作をつくった。母校・新潟大学の先輩、柳本雄司さんから「良寛さんを落語にしてくれないか」と頼まれたのがきっかけだった。初めは、良寛さんを笑うものにはできないと思い、断っていた。

ところが、良寛さんの遺徳を顕彰する全国良寛会の副会長を務める柳本さんは次から次へと資料を送ってくる。いつしか外堀を埋められ、新作をつくると約束。資料を読み進めると、知っているつもりでいた良寛さんのことを全然知らなかったと気づいた。

良寛さんの生きざまを追うと、人生が輝いて楽しくなる秘訣が詰まって

いる。例えば「自在に生きる」。自分に正直に生きた良寛さんの思いを落語で伝えたい。そんな思いで生まれたのが、「いのちの落語 良寛ものがたり」だ。

ネタおろしは、昨年7月。新潟大学人文・法・経済学部同窓会の設立60周年記念イベントの一環で、一般市民にも公開した。若き良寛さんの修行時代を中心に描いたが、「良寛落語」を完成させるには円熟期にスポットを当てた続編も必要になるだろう。

「いのちの落語 良寛ものがたり」を初めて披露する筆者(2013年7月、新潟市)

「いのちの落語 良寛ものがたり」を初めて披露する筆者(2013年7月、新潟市)

「いのちの落語 良寛ものがたり」を初めて披露する筆者(2013年7月、新潟市)

「いのちの落語 良寛ものがたり」を初めて披露する筆者(2013年7月、新潟市)

「いのちの落語 良寛ものがたり」を初めて披露する筆者(2013年7月、新潟市)

「いのちの落語 良寛ものがたり」を初めて披露する筆者(2013年7月、新潟市)

「いのちの落語 良寛ものがたり」を初めて披露する筆者(2013年7月、新潟市)

「いのちの落語 良寛ものがたり」を初めて披露する筆者(2013年7月、新潟市)

「いのちの落語 良寛ものがたり」を初めて披露する筆者(2013年7月、新潟市)

「いのちの落語 良寛ものがたり」を初めて披露する筆者(2013年7月、新潟市)